



第13回

真宗高田派本山専修寺

(三重県津市一身田町 2819)

鳥越一向一揆歴史館友の会／北陸城郭プロジェクト 塩谷忠士

友の会の世話人をしております塩谷です。今回は三重県の真宗高田派本山専修寺を紹介します。真宗高田派は親鸞が下野国高田（現在の栃木市真岡市高田）に嘉禄元年（1225）専修寺を開基し、門弟真仏（第2世）・叡智（第3世）が率いた高田門徒が布教して広がりました。

私が専修寺を訪れたのは令和5年5月、開山親鸞聖人御生誕八百五十年、中興真慧上人五百年忌、聖徳太子千四百年忌など特別法要（奉賛法会）の開催期間中で大勢が参拝に来ていました。新宝物館燈炬殿の初企画展と360度映像で親鸞聖人の教えに触れるVRシアターを楽しみました。

中興の祖第10世真慧は下野国高田を出て関東、東海、北陸、伊勢と化導し、寛正6年（1465）伊勢の門徒の懇請もあり一身田村に無量壽寺を建立しました。大永6年（1526）本山の高田専修寺は兵火のため焼失しましたが、依然高田派法主となる条件は高田専修寺住持職に承認されることでした。永正9年（1512）真慧が亡くなると、実子応真と養子眞智の相続争いが始まり、永禄元年（1560）正親町天皇が応真の養子堯慧に住持職を承認すると眞智は越前に熊坂専修寺を開創して本山争いを始めました。この頃に一身田無量壽寺を正式に本山とし一身田専修寺と名乗るようになります。江戸時代に入ると一身田専修寺は本山専修寺を確立し、戦乱で荒廃していた下野高田専修寺を本寺専修寺として伽藍の復興に努めました。江戸幕府による寛永11年（1634）寛文3年（1663）の2度の裁定により本山争いは一身田側の勝訴でようやく終結しました。

正保2年（1645）大火により一身田専修寺は全山焼失、翌3年第15世堯朝が幕府に抗議するため自害するという危機的状況に際し、第14世堯秀は右大臣花山院定好の第四子を養子にして入室させ（第16世堯円）、内室に津藩主藤堂高次の五女糸姫を迎えました。それに伴い一身田村西隣の窪田村などの土地を寄進され大きく西側に拡張しました。寄進は万治元年（1658）のことでこれ以後に境内、寺内、町屋の四方を外堀で囲む一身田寺内町が生まれました。中世には南方の山裾を通っていたと推定されている京都方面から伊勢に向かう伊勢別街道が寺内町の南に沿う位置に移されました。寺内町の東には江戸初期まで伊勢湾を南下する伊勢街道が通っていたと考えられ絶えず参宮客で賑わう地でした。

平成29年11月28日三重県初の国宝建造物として御影堂と如来堂が国宝指定されました。いずれも高さが25mを越える木造建造で一見の価値があります。



国宝御影堂

参考資料
専修寺
ホームページ

「親鸞の生涯と
高田門徒の展開」
平松令三著
法蔵館

現地案内板
ほか



境内北側の外堀



寺内と町屋を隔てる内堀・石橋と釘貫門